

「心から楽しいおいしい食事」 を支える為の食事支援

～器に着目した取り組み～

施設名：デイサービス はなぶさ
なかむら な つ き
発表者：介護福祉士 中村 奈津貴



<研究目的>

●食事を残す利用者に対して器を変えることで「心から楽しい・おいしい」と感じて貰い、残さず食事が食べられるようになる取り組みを行う。



<研究方法・期間>

1. 普段、使用している食器から事業所で準備した弁当箱に詰め替えて食事を提供する（3回実施）

期間：平成25年 6月 17~19日



<研究方法・期間>

2. 自宅で使い慣れた食器を持参して貰い、それを使用し食事を提供する（5回実施）

期間：平成25年 6月24日～7月10日



<結果1>

★事業所で用意した弁当箱を使用する★

対象者	実施前	実施後	行動の変化
A氏	全介助 (時間要す)	介助量減	自分で箸を持ち、食事に手を付ける場面あり(これまではなかった)
B氏	一部介助 (時間要す)	介助量減	少しの時間ではあったが介助なしで食事をする時間が増えた
C氏	副食残す	副食 摂取量増	「違う入れ物も良いね」と話して笑顔で食事する
D氏	主食残す	完食増	「おいしそうに見えるが持ちにくい」と話すが進んで食べている
E氏	主食残す	完食増	中身が見えにくくなり、食べずらそうにしている
F氏	副食残す	摂取量減	「持てないから嫌だ」と話す。表情も陰しい



<結果2>

★自宅で使い慣れた食器を使用する★

対象者	実施前	実施後	行動の変化
A氏	全介助 (時間要す)	介助量減	自分で箸を持ち、食事に手を付ける(暫くの間)また集中して摂取している
B氏	一部介助 (時間要す)	介助量減	これまでよりも短い時間で完食する
C氏	副食残す	ほぼ完食	「自分の食器だとご飯が進む」と話して笑顔で食事する
D氏	主食残す	ほぼ完食	「家で食べている感じだね」と話して進んで食べている
E氏	主食残す	変わりなし	自宅の食器は軽くて持ちやすいようだが、食事の様子はいつもと変わりなし
F氏	副食残す		食器を持って来るのは嫌と言われ実施出来ず



<まとめ>

- 器の変化が「食べたい」という思いを想起させる一つの要因となった
- 個々にあった食事を支援することが大切である
- 生理的欲求のみならず社会文化的側面からの視点も重要である

